

CSRと環境と未来と

おわりに

一人でも多くの良識ある経営者の理解を求めたい、一つでも多くの企業に正しい取組みを始めてほしい。

〜TBLの熱意です〜

お問い合わせは

トリプルボトムラインLLP
〒460-0016
名古屋市中区橋1-17-28
TEL052-332-1187
FAX052-332-1187

CSR5つのはたらき

1. 開かれた会社をつくる
2. 風通しのよい会社をつくる
3. 活力を生み出す会社をつくる
4. 社会をよくする会社をつくる
5. 地球環境をよくする会社をつくる

TBLLLP

トリプルボトムラインLLP

Mail: info@tblp.com

URL: http://tblp.com



「木、立ちて道、生ず」
〜論語〜
根本を正しく確立すれば、
手立てが見えてくる

☆編集室から

CSRニュースレターvol.001をお届けします。次回は6月11日発行予定です。ニュースレター各号は、配布用pdfを用意しています。

ご入用の方は、担当・成瀬龍朗 Mail: naruse@tblp.com までご連絡ください。

企業の自立

CSRニュースレター2007・05・21

Vol.001

特集 CSRはなぜ必要か

CSRの必要性

会社はこれまで順調に、あるいは大きな躍進なしで過してこられたから、これからも大丈夫だろう。そう考えるなら、それは大きな間違いを犯すことになるでしょう。

会社の将来は大丈夫と、責任を持って言えますか？ 自問自答してみてください。なんにも問題がないといえるなら、なんにも申し上げることはありません。

いえないとしたら、CSR*が必要で、す。理屈抜きにそう自覚しなければなりません。そして、CSRの中身を理解しなければなりません。分からない、難しいなどといっていたら、それはただの逃げ口上にすぎません。

*CSR(Corporate Social Responsibility)
「企業の社会的責任」

CSRとは何か

CSRとは「企業の社会的責任」のこと、なかではありません。これは英語をただ直訳しただけです。直訳は無視してもかまいません。大事なことは中身です。

CSRの中身は、簡単に二つの合言葉で表せます。

1. 価値観を共有しよう
2. 説明責任を果たそう

説明します。

「企業の自立」はTBLのオリジナルコンセプトです。

TBLLLP

トリプルボトムラインLLP

今月の学び

木、立ちて道、生ず

〜論語〜

(根本を正しく確立すれば、
手立てが見えてくる)



ハルニレ(春楡)
別名 ニレ、エルム
ニレ科ニレ属の落葉高木
大気浄化能力A、すなわち
二酸化炭素吸収力が高い
環境樹木です。
北海道と欧米ではエルムと
呼ばれています。

価値観の共有

価値観の共有とは、会社のエネルギーの源泉です。会社特有の事業の目的・使命を共有すること、これは会社の価値観です。存在理由ともいえます。

次に、社員が仕事の目的・使命を共有すること、これは社員の価値観です。生きがい、働きがいともいえます。

で、この二つの価値観は、モノ(製品・サービス)とヒト(人材)の表裏二つの側面に過ぎません。しかし、会社の価値観は経営者が、仕事の価値観は社員が、という区別をしたら間違いです。経営者も管理者も担当者も、つまり全員が二つの側面をもつ価値観を一つとして共有することです。

もつといえは、会社内部ばかりでなく、サプライヤーも株主も、もちろんユーザー・消費者も共有すべき価値観なのです。

説明責任の履行

説明責任とは、情報の公開のことです。外にむけて公開することは当然ですが、内に向けても公開しなければなりません。

そんなことがどこまで可能か、という反論がありますか。いまだき秘匿すべき情報ってなにがあるのでしょうか？

個人情報保護

秘匿すべきは、個人情報と技術情報です。他はすべて公開可能情報でしょう。経営判断がどうのこうのといっている時ではありません。判断はノウハウですが、判断の結果は公開情報です。

二つの区別をつけることが、これからの大事です。

特集 CSRはなぜ必要か
〜つづき〜

CSRを どうはじめるか

節税からの脱却

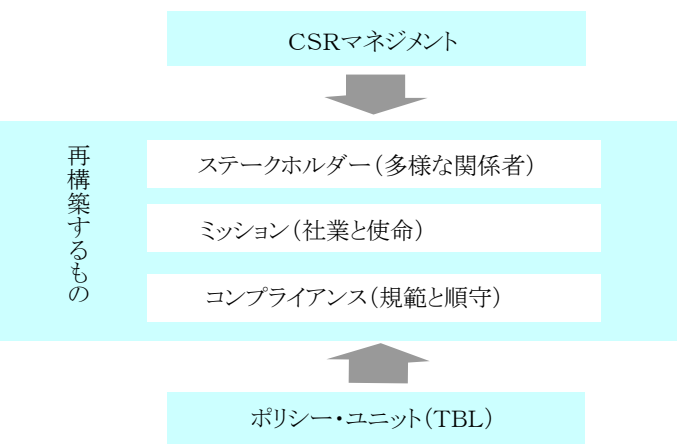
たとえば税務ですが、税という付加価値配分が「会社が属する地域社会と国への還元」とすれば、そもそも節税などという考えは必要ありません。財務会計一式は理屈抜きに公開できます。

そういう公開は、外からも内からも歓迎されるでしょう。信頼を生むという点で、説明責任を果たすことになるのです。

その他の公開情報もふくめて、説明責任は世の、内外の、信頼を確保する根本原理なのです。

責任のとれる行為

ちなみに、説明責任を果たすためには、だれもが責任をとれる行為をする必要があります。説明責任＝行為責任なのです。



CSRマネジメント

CSRは、むかしからあります。でも、今日的なCSRは、ステークホルダー*、ミッション、コンプライアンスと、3つの対応が要請されています。そこがむかしと違います。

ステークホルダーは、企業をとりまく、多様な関係者。マネジメントの対象として適切な対応と配慮、そして説明責任を果たしていく取り組みです。

ミッションは、何を持って社会に貢献するかという、使命の再確認や再構築です。

コンプライアンスは、節義や謙讓、誠実や言行一致など、行為規範の成文化と実施です。

これらを全社的に共有することによって、企業価値の向上を図るのです。

CSRマネジメントの着地点は、社会にどう貢献したかという結果です。それが社会の評価のものさし(尺度)になるのです。

多様なステークホルダー

企業をとりまくステークホルダーは、顧客、従業員、株主、債権者(銀行)、供給業者、政府・行政、P・O・N・G・O、地域社会も国際社会も、メディアも地球環境も、すべて新しい顔をしたステークホルダーとして、企業をとりまいています。

CSRマネジメントは、ステークホルダーマネジメントそのものなのです。

ミッションと企業価値

ミッションとは、企業の目的と事業を表現しているものです。存在意義(目的と使命)と事業領域(社業)です。

ミッションは人の命題であり、企業の命題です。人は使命で動き、企業も使命で動きます。仕事は単なる労働でなく、仕事としてあるために人と企業に使命があり、それは共有されなければなりません。その使命があればこそ、社会は必要な事業として認知します。

*ステークホルダー(stakeholder)＝利害関係者

CSRを どうはじめるか

コンプライアンスと内部統制

コンプライアンス*は、法令順守と直訳されますが、法律ばかりでなく、企業規範をどう守るかということです。

したがって、今日的なコンプライアンスは、「内部管理態勢の刷新」という意味です。

意味を強くして「内部統制」となり、さらにリスク管理を組み込み、「リスク管理と一体」となって機能する「内部統制」となります。

TBLは、内部統制ということばを使いません。統制でなく、管理と考えるからです。

また、リスク概念を、「自社のダメージを回避する」という視点で取り入れません。ステークホルダーのダメージを回避することという、マネジメントのフレームワークを設定します。対象とすべきは自社でなく、ステークホルダーなのです。

CSRマネジメントは再構築するもの

CSRマネジメントは、現在のベースとなるバリュー(社是・経営理念・企業風土など)とビジョン(理想・願望)を再認識した上に成立するものです。

ですから、新たな構築でなく、再構築です。

とりまくステークホルダーの要請とはなにか、その要請をどう対応し配慮するかにこたえ、社会にどう資するかというミッションを全員が共有し、すべきこと、してはならないことを行為規範としてたて、それを順守していくのです。

ちなみにCSRも、これまでのマネジメントと同様、PDCA(Plan-do-check-action)という計画、実施、点検、見直しというサイクルで行っていくものです。

TBLの仕事

・ポリシー・ユニット

1. コード・オブ・コンダクト(行為規範)の策定
2. ポリシー・ブループリント(政策計画)の策定

・CSRリサーチ

1. ミッションリサーチ(事業・使命・目的調査)
2. ステークホルダーリサーチ(要請・配慮調査)
3. コンプライアンスリサーチ(規範順守調査)

TBLは、CSRリサーチで、企業の現状を把握・分析し、そこからCSRマネジメントの再構築をプログラムします。

その成果として、価値を再認識し、使命と行為指針を確定し、将来事業ビジョンをもった、政策(ブループリント)を策定します。



ハルニレの葉
写真撮影:青木繁伸
(ハルニレの樹とも)

*コンプライアンス(Compliance)＝法令順守